

— 激しい戦いの中から 切り開いた道

日本で最も全教（全日本教職員組合）の組織率が高いと誇っていた京都。かつては激しいイデオロギー対立が続いていました。

こうした中で、私も京都市教育委員会会の先輩方は、公教育の理念を守るという志を胸に、文字通り命懸けの戦いを続けてきました。京都市の教育委員会は夜十二時を過ぎても電気が消えない。年中無休、二十四時間営業の不夜城だと、賞賛と揶揄の入り交じった評価をいただけてきました。

その伝統を受け継ぐ私どもは、現在の教育を、明治維新、戦後に次ぐ第三の教育改革期と位置づけ、地域の方々と手を携え、日々様々な試みに取り組んでいます。教育という仕事は、やればやるほど仕事が増えるものです。そうした中で私も、正月の三日間以外はほとんど休みなしに仕事に邁進させていただきました。次代を担う子どもたちの教育への志を胸に、充実した毎日です。こうした活動が様々な成果を生み、いま、京都市の教育は全国から注目を集めるようになりました。

私は京都に生まれ京都に育ちました。

竈金の精神で築いてきた「ほんまもん」の教育

公教育に懸ける祈り

戦後、政治の場で行われるべきイデオロギー対立が持ち込まれ、不幸な道のりを歩んできた日本の教育。

日本で最も共産党の組織力が強いと言われる京都はかつて、その最も激しい主戦場であった。凄まじい戦いを乗り越えてきた京都市はいま、

地域ぐるみの教育改革を実施し、全国の注目を集めている。

その改革の中核を担い、獅子奮迅の活躍を続けてきた門川教育長の、公教育に懸ける志、そして祈り。



京都市教育委員会教育長

門川 大作

かどかわ・だいさく 昭和25年京都府生まれ。高校卒業後、京都市教育委員会に勤務。総務部長、教育次長を経て、教育長に就任。その傍ら文部科学省、家庭教育支援の充実についての懇談会、委員など様々な公職を歴任。現在中央教育審議会「教員養成部会」委員、「教員免許更新制」ワーキンググループ委員を務める。

いまは教育長を務めておりますが、子どもの頃は好奇心旺盛で夢中になるものがたくさんあり、あまり机について勉強をした記憶はありません。特に高校時代は、ベトナム戦争が泥沼化する中、平和への意識が高まり、反戦運動にも打ち込んでいました。大学受験を断念し、地元京都市役所に就職し、教育委員会に勤務することになったのです。自分のそれまでの人生を反面教師に、私は社会人としての第一歩を踏み出したのです。

戦後の日本の教育は、大変不幸なことにイデオロギー対立が学校の教室にまで持ち込まれてしまいました。連日連夜団体交渉が続き、教育委員会の前の廊下では座り込みの絶える日がありませんでした。その中から組合幹部が多数逮捕されるようなこともありましたが、ストライキも絶えず、それに対して当時の京都府の革新系の知事は「ストライキも教員の仕事だ」と一切処分しませんでした。私が就職した時分の京都市教育委員会では、こうした中で先輩方が凛とした姿勢で懸命に孤塁を守っておられました。

当然仕事は桁外れに忙しく、年度の切り替わる三月、四月ともなれば、十日間も家に帰れないことがありました。

ほとんど役所に住み込みに近いかたちで仕事をしてきたのです。

懸命の取り組みの甲斐あって、例えば国旗、国歌問題を京都市では十数年前に克服しました。現在、本市には約三百の学校がありますが、教職員の不起立は十数年前から一人もありません。また、昭和四十年代の初めに、全国一斉の学力テストは中止になりましたが、京都市は「研究会テスト」と称し、全国で唯一続いています。現在本市には、教科や領域・分野ごとに教職員の自主的な教育研究会が百二十六あります。その研究会の代表と教育委員会の指導主事とが共同で問題を作成し、小学校一年から中学校三年まで全員を対象に調査をし、指導に生かしてきました。音楽や家庭科があるというのも京都市ならではのことで、

厳しい中であればこそ、「一人ひとりの子どもを徹底的に大切にしよう」と志高く懸命な努力でこうした実績を上げてきました。先輩方の涙ぐましい取り組みのおかげで足腰を鍛えられ、京都の教育界には「ほんまもん」が生まれたのだと思います。

縁に恵まれ

——高卒唯一の教育長に

公教育の理想に燃え、仕事に明け暮

れる中、私の転機ともいえる出会いがありました。それは、現市長の榎本頼兼氏との出会いでした。

いまから三十数年前、教育委員会に入ってまだ数年目の二十代初めの頃、日々の仕事の中でどうしても納得できないことがあり、夜中に一人の係長をつかまえて、不満をぶつけました。その人は、忙しい中、夜を徹して私の話にじっくりと耳を傾け、こう言ってくれたのです。「うん、門川君、確かに君の言う通りかもしれない。しかしいまは大事な時だ。とにかくわしの言うことを聞いてやってくれ」。次の人事で私はその人のそばで働くことになりました。その人がいまの榎本市長だったのです。

いま振り返れば若気の至りで、話の中身も、恥ずかしくなるぐらいに乏しいものであったにもかかわらず、私の話を黙って聞いてくれ、人事で自分のそばにつける。私はその人間的な大きさに打たれ、さらに仕事に邁進しました。

高卒の私は勉強の必要性を感じ、立命館大学の夜間に学び、教育実習に参加しながら仕事をしました。昼間仕事をし、夜大学へ行き、終わればまた役所に戻るといって、忙しくも充実した

日々で、何とか卒業しました。

当時の役所の人事は、大卒キャリアのポストと、ノンキャリアのポストはおおむね決まっていたのですが、私は榎本氏の下で、次々と重要なポストを与えられました。そのたびに、自分にもできるのか、本当に大丈夫だろうか、ととまどいつつも全力でぶつかってきました。平成十三年には五十歳で教育長への就任を仰せつかりましたが、全国の指定都市で、おそらく高卒就職の教育長は私だけでしょう。これも榎本市長をはじめ、様々な先輩の皆様方のご指導の賜物と心から感謝する次第です。

——日本の将来を決める 第三の改革に着手

京都市はいま、先輩とともに成し遂げてきた第二の教育改革に続き、第三の教育改革に邁進しています。私たちは、この改革の成否が、日本の将来を左右するとの信念を持って取り組んでいます。

この第三の改革は、現市長の榎本氏が、平成四年に教育長に就任されたことで実質的なスタートを切りました。

榎本氏が教育長に就任された四月一日のことは、いまでも忘れられません。教育長就任の記者会見を済ませ、教育

長室に戻ってこられた榎本氏は、当時総務課長であった私を呼ばれ、「明日からすべての仕事に優先して学校回りをする。一年間で三百十六校すべて回り切る」とおっしゃったのです。

ただでさえ不夜城と呼ばれるほどの激務。私は、「無理です。二、三年かけて回られてはいいでしょうか」と言いました。すると榎本氏はニコッと笑われて「無理やろな」と言われました。ああ平常心をお持ちだと思いきや、「無理やと思うから、さっきの記者会見で断言してきた。頼むわ」とおっしゃったのです。

「榎本教育長、三百十六校年度内に訪問を公約」

翌日の新聞に出た見出しを見て、教育委員会のメンバーは覚悟を決めました。それから連日連夜の学校回りが始まりました。夜遅くに榎本教育長が教育委員会に帰ってきてから、校長会や研究会の幹部、指導主事を交えて侃々諤々議論を重ねました。「素晴らしい実践をしている学校がある。どうしてあの学校の実践を全市に広められないのか」「本当に残念な学校がある。教師の指導力に格差がある。何とかしなければ」。毎晩遅くまで、こんな議論をとことん戦わせていったのです。

そうした中で実現したものに、週間指導計画「週案」があります。各々の教師の裁量に任せるのではなく、しっかりと計画のもとに子どもたちを指導するために、毎週末に次の一週間分の指導計画を校長に提出するのです。

教育の管理統制に繋がると、凄まじい反対運動が起こりましたが、教師の自主性、創造性を生かすためにこそしっかりとした計画が必要と説いて回り、ついに二年がかりですべての教員が実行するようになりました。それとともに、学校長はすべての仕事に優先して全教室に入って授業を見る「入り込み指導」を最優先課題としました。

さらには自然体験が大事だといながら、宿泊自然体験活動ができていない学校があったために、それを実施したり、日曜日の運動会、日曜参観をやることなどを決め、いずれもすべての学校でやり抜きました。

とにかく、やれることは何でもやろう、やれないと思っていることでも工夫をすれば可能ではないか。子どもはこうした意識で教育委員会を挙げて第三の改革に取り組んできたのです。

改革のカギは学校分権と校長の裁量権拡大

私たちはこうした榎本教育長の教育

改革を引き継ぎ、さらに推進しています。

平成十三年度にはすべての学校に学校評議員制度を、十五年にはすべての学校で外部評価を含めた学校評価システムを全国に先駆け導入しました。子どもがその先に視野に入れているのが「学校分権」です。

これからは地方分権の時代といわれていますが、教育の世界では、学校分権こそが改革のカギになると考えています。校長先生が地域、保護者とともに、自立した学校づくりを進めていくためには、学校長の裁量権を拡大することが不可欠だと考えているのです。

例えば予算です。できるだけ事業別費目別の予算をやめ、学校長の方針に従って予算編成をしていく仕組みをつくりました。例えば、便所掃除を外部の業者に委託するのをやめ、子どもと教師と地域の住民と一緒にやれば、掃除費を図書費に回せます。また、京都は地球温暖化防止条約の発祥の地です。環境教育を重視し、光熱水費を節約すれば、それも図書費に回せる。こうしたことを、校長の決断で進めていける環境を整えてきました。

併せて、授業日数の減少に伴う学力低下への懸念が広がる中、二学期制を

導入して夏休みの短縮を進めています。そのために平成十七年、全中学校の普通教室にクーラーを設置しました。十八年八月までには全小中学校の二千五百の普通教室にクーラーを設置します。

本来六十四億円の予算が必要ですが、PFI（民間資金活用による社会資本整備）方式により、十八億円節約することができました。これによって十八年度、夏休み等を七日以上短縮し、全国最多となる年間授業日数、二百五日以上を確保します。

教育界はとかく総論ばかりで物事が進まない傾向が強いのですが、総論ではなく具体論、具体策、何をやるかが重要なのです。時には形から入って自身の充実に迫っていく。私たちはこうした取り組みをきょうまで進めてきたのです。

国の学習指導要領を越える内容を実現

こうした環境整備を進めつつ、私たちは子どもたちの学力向上に力を注いでいます。

公教育への不信の要因の一つは、公立高の長期低落傾向にあります。都市部の公立高では進路保障がしてもらえないため、進学希望の強い生徒は私学へ流れる傾向が定着しています。しか

し、京都市においては熱意ある教師の努力で、いま京都市立高校全九校が大きく飛躍しています。

学校は、組織的、計画的に教育活動を行う公的教育機関です。単に先生任せだけでは駄目なのです。そのために、現場の熱心な教師にお集まりいただき例えば小学校では約四百人の先生と教育委員会の指導主事が、「学習指導要領京都市版細案」を作成。私どもの間ではこれを「京都スタンダード」と呼んでいます。地方の時代を先取りし、学習指導要領を超える発展的な内容を必修化した指導計画を全国で唯一独自に作っているのです。

この中には、道徳教育も盛り込んでいます。京都ならではの道徳教育を実践しようと、教師と教育委員会とで指導教材を作り、指導計画と教材をセットですべての教員に配布して研修を実施してきました。

指導計画の作成に加え、教師の指導力を高めるために、京都市の教員研修センター「総合教育センター」は全国で唯一夜九時まで研修を実施しています。そして、教育委員会の研修会とともに、百二十六の教育研究会が自主的創造的な研修会を開催してくれています。

さらには、情報化推進総合センターというコンピュータ教育センターがあります。ここでは、夏休みも土曜日も夜間もコンピュータの操作、あるいは指導力向上のために研修をしてきました。この結果、平成十六年京都市では、コンピュータを操作できる教員が百割、コンピュータを使って指導できる教員が九十五割と全国トップになりました。

また、四年前、国公立大学に六名しか合格できなかった市立堀川高において、新学科の設置を契機に改革が進み、十七年春には百三十三名が国公立大学に現役合格。京大現役合格率が二年連続全国の公立高でトップになりました。そして何より大きかったのが、この成果が教師の人事異動ではなく、元々そこにいた同じ教師の意識改革によって実現したことでした。

「人間の能力の差は五倍まで、やる気の差は百倍の結果を出す」。私の好きな言葉です。堀川高の教師はそれを文字通り実現し、私たちに自信と勇気を与えてくれました。

いま、教師の指導力不足が批判に曝されていますが、少なくとも京都市は世界のトップ水準だと私は思っています。世間では、駄目な先生の話題ばかりが取り上げられますが、現場ではた

くさんの優れた教師が、子どもたちに精一杯の情熱を注いで日々全力で活動してくださっているのです。私たちは、そういう頑張っている人たちに光を当てるため、PTA、校長、市民、経済界の代表で「選考委員会」を創り、毎年五百〜六百人の方を表彰し、一人につき二万円の研修用図書券を進呈しています。

頑張っている先生も、必要最低限のことしかしない先生も、すべて給料が一緒なのはおそろく日本だけです。将来的にこれを変える体制が整う前に、何か京都でできることはないかと考え実施したのです。

実は、この図書券の費用などが不当支出であるとして、一部の市民から子どもはいま訴えられております。しかし、正しいことをしていれば必ず理解していただける日が来ると私は信じています。

——公教育の信頼回復を目指して

こうした活動をベースに、いま私どもが最も力を注いでいるのが、開かれた学校づくりを通じての、保護者、地域と学校との双方向の信頼関係の確立です。

公教育に対する全国的な不信感、

教師の指導力不足によるものばかりでなく、地域と学校の本当の信頼関係が培われていないことも大きな要因の一つであると思います。

そこで私どもは、子どもの教育の実態や学校の教育方針について、積極的に説明責任を果たすよう働きかけました。また、地域版の学校だよりの作成や、すべての学校でのホームペー

ジの立ち上げ、あるいは一週間連続の自由参観日の設定など、地域の皆さんにどどん学校に来ていただくための試みを地道に実施してきました。

中でも力を入れているのが、子どもたちが地域で学ぶ環境づくりです。例えば、中学校の二年生一万人が、三千三百の事業所のお世話になり、原則五日間の職場体験、奉仕体験を実施しています。こうした試みを通じて、地域の皆さんと情報を共有し、課題意識を共有し、その課題意識を行動の共有に高める。そして評価も共有し、教育の喜びもともに分かち合おうと考えているのです。

こうした試みは、私どもが今回の教育改革のキーと考える、「総合的な学習」の内容にも深く関連しています。

京都市では八年前、全国に先駆けて文部科学省の「総合的な学習の時間」

の研究開発校の指定を受けました。そして、六年前の移行期に、すべての小学校で十五時間以上の総合的な学習の時間を実践したのです。

全国的にせっかく導入された総合的な学習の時間に、どのような指導をすればよいかわからず、その価値を十分に生かし切れていない学校が多数見受けられます。教師の力量により、その内容にはずいぶんばらつきがあるようです。

私たちは、このようなことがないよう、入念な導入準備と徹底的な研修を実施しました。

七年前のある日、私が夜の九時前に総合教育センターへ視察で行った時、受付も指導室も空っぽで誰一人いません。すると、上の方から賑やかな声が聞こえてくる。すぐに四階へ行ってみると、四百人を超える超満員の会場の中で、総合学習の先進事例を先生が一所懸命に研修しているのです。大変な盛り上がり、私は「やった! この試みは必ず成功する」と心の中で叫びました。

いまの教育で一番問題なのは、学校の学びと毎日の家庭生活、地域の生活が乖離していることです。ここを何とかしなければ、いくら大学へ行っても

生きた勉強ができず、さらに学ぼうという力になりません。

そこで、環境を守るというテーマで地域に出かけていくという試みをしました。地域の方々は、子どもたちを温かく迎え導いてくれました。

いま、五千人を超える地域の方々、人口の二割が学生という京都のまちの特性を生かし、千人近い学生がボランティアとして活躍いただいています。

例えば、ある小学生のグループは、公園に行つて虫を調べることにしました。ところが外は寒く、公園に虫はいませんでした。先生がどうしようか、公園に実っている柿でも採ろうかと眺めていると、そこへ近所の男性が自転車で通りかかりました。「何を見ているんだ」という問いかけに「あの柿は渋柿やろ」と答えると、「うん、だけど焼酎に漬けてお米の麴に入れたら甘くなるんだ」と教えてくれました。住民との交流によって、予定していた虫の研究は急遽「渋柿はどうして甘くなるのか」というテーマに切り替わり、子どもたちは大変有意義な学びを得ることができました。

重要なことは、こうした体験を、ただ楽しかったで終わらせないことです。教科との関連を持たせ、生きた学びと

して深めていく工夫も合わせて実施していきました。こうした総合的な学習の全校の成果を、平成十六年度に「大好ききょうと 地域に学んだ五年間」と題する指導資料、実践事例集にまとめました。

二年前、NHKが学力問題の特集を組んだ時、世界で最も学力が高いのはフィンランドであり、日本で一番高いのが京都市の御所南小学校だという調査結果を報道しました。大阪教育大学の先生が、この小学校の子が非常に生き生き学んでいる様子を目に留め教材会社に学力調査を依頼したところ、学力が非常に高いことが判明したのです。そしてこの学校が熱心に実施しているのが総合学習だったのです。

学力テストを継続的に実施している私どもは、この小学校が京都市の中で必ずしも一番ではないことを承知していました。学校ごとのテストの結果は公表しないため、外部の方には分かりませんが、トップグループの一つに過ぎないのです。それが学力日本一と評価されたことで、京都市内の学校の教育水準の高さを実感し、自分たちのやってきたことは間違いないなかつたと、改めて自信を持ちました。いま全国では、これから総合学習がどうなるのか

と揺れていますが、私どもはこの実績に確信を持っています。

——様々なプロジェクトで市民との絆を深める

さらに市民参加のプロジェクトとして、例えば、「人づくり二十一世紀委員会」という市民組織を榎本市長の提言で結成しました。ここでは河合隼雄先生を代表に九十三の団体に参画していただき、「いま、子どもたちのために大人として何が大切か、ともに考え行動しよう」と銘打つての取り組みを進めています。この活動の一環として、四年前には「道徳教育振興市民会議」を立ち上げていただきました。ここでも河合隼雄先生に座長になっていただき「やっていいこと悪いこと、みんなで考えてみませんか」という市民アンケートを実施しました。おかげさまで二万二千三百人の方にご回答いただき、四千人の方から詳細な意見もいただきました。これらをもとに平成十六年、提言「しなやかな道徳教育を」をいただき、その具体化を進めています。

また、理科が大好きな子どもの育成、起業家教育、IT、読書活動振興等々二十を超える市民参加プロジェクトが進行しています。

中でも大きな効果を上げつつあるの

が、トイレ掃除の実践です。広島県の

学校が、子どもと一緒にトイレ掃除をするので、子どもが変わり、学校が変わったという話を聞いて、この運動の創設者であるイエローハット相談役の鍵山秀三郎先生と「掃除に学ぶ会」の皆さんにご指導をいただき、十七年

二月に市内の教師四十人と「便教会」を結成。学校での掃除の会の開催を通じて、子どもや地域の皆さんと感動を分かち合っています。この運動によって教育に大きな効果が生まれつつあると同時に、地域ぐるみで学校をよくしていくという機運が一層高まっています。便教会のメンバーはすでに百人に達しています。また、市内の九十八名の小中学校のトイレ掃除が、子どもたちで行われるようになってきました。

——地域の子どもは地域で育てる

世界中で千年もの長きにわたり都が続いた都市は京都だけです。京都は歴史と伝統のまちであり、現在でも国宝の二十割、国の重要文化財の十五割が京都市にあり、紛れもなく日本人の精神文化の拠点都市です。これらを守り、また国家戦略として日本人皆で守っていききたいと念じています。こうした意味から京都の教育の役割も非常に重要

だと思っています。

その京都にとり、明治維新は大変な危機でした。天皇陛下が「ちよつと東京へ行つてくる」と出て行かれたまま、正式な遷都宣言もないままに京都は都の地位を失いました。

京都は幕末に洛中の多くの箇所が焼かれました。京都が京都であるのは都であるからに他ならないのに、その地位も失い大きな危機に陥りました。洛中の世帯数は七万から五万へと激減したそうです。

その苦しい状況の中から立ち上がった先人たちの苦闘こそが、私たちの原点なのです。

京都には、応仁の乱の戦乱の中で町衆が自治をした伝統を引き継ぐといわれる「番組」という自治組織がありました。その番組ごとに長老たちが集まり、危機の中で「まちづくりは人づくりから」、教育こそ京都復興の要との考えに基づき、学校づくりに取り組みました。知恵を出し合い、ともに汗をかき、お金も出し合って学校を創設し、運営されました。番組によっては、台所の竈の数ごとに各家庭からお金を出し合ったことから「竈金」という言葉も残っています。

この結果、明治五年の学制発布に先

駆け、明治二年には洛中の隅々に六十

四もの番組小学校が創設されたのです。明治五年に日本で初めての博覧会が京都で開かれた時、当地を訪れた福沢諭吉は、自分は博覧会ではなく、学校を見に来たと述べ、「大凡世間の人、この学校を見て感ぜざる者は、報国の心なき人といふべきなり」と京都の学校を絶賛しています。

今日、京都市の学校も少子化の中で四十五の小中学校の十四校への統合が進んでいます。そこで示されたのが、「竈金」の精神を受け継ぐ地域、保護者の「子どもたちにより良い環境を」という熱い思いと英断であります。

地域の子どもは地域で育てる——先

人たちの築いた「竈金の精神」をベースに、私どもはこれからの教育改革に志をもつて取り組んでまいります。いま、日本の社会の二極化が危惧されています。親の経済力によって子どもの学力、進路が左右されてはならない。ここへの挑戦が公教育の大きな使命でもあります。

平成十七年の年頭に榊本市長は「先見、先進、先導」という言葉を掲げました。先んじて時代を創る京都であり続けるという教育への志を胸に、地域の皆さんとともに力を尽くしてまいります。

愛知 三河の特産品・えびせんべい！

環境に優しい食べられるトレー

三河弁で「食べてください。」という意味から名づけられた「たべりん」の中身は8種類の最高級おせんべいを封入し、食べきりサイズに致しました。地球環境に優しい、「愛トレー」として食べていただける逸品です。



たべりん

「えびせん家族」。
まごころいっぱい。
慶弔用・ご贈答用
共に全国発送承ります。



住 所：〒447-0827 愛知県碧南市前浜町2-35
フリーダイヤル：0120-42-4383
ホームページ：http://www.ebisen.com
E-mail：taro@ebisen.com



スギ製菓株式会社

住所：〒447-0857 愛知県碧南市大浜上町3-85-1